

向き合う



乳がんの治療を受け、復職したものの、入社したときは考えてもいなかった退職届を書いた。喪失感は大きく、がんの診断より、心は痛かった。「社会的な死」だと思った。

そのとき、少しだけ年上の病友仲間（がん友）と出会った。職場では「眠り姫」と呼ばれていた。薬の副作用による眠気だった。「仕事を制限されたくないから職場に病気のことは隠している」と言っていた。

病状が進んでいったが、亡くなる寸前まで分厚いスケジュー

キャンサー・ソリューションズ 社長 桜井 なおみさん ②

ル帳に予定を書き込んだ。「そんな先の日はない」と分かっていた。書き込んでいた。亡くなった後、火葬場で上司は私につぶやいた。「つらそうな状況は分かっていた。俺が殺したのか？」。職場もつらいのだということを知った。「なぜそこまでして働くのだろうか？」。仕事を辞めた自分と、息をひきとるまで働いた友を比べた。

人生初めての無職。この時間を有効活用しようと思った職業訓練校で、病気を理由に退職せざるを得なかった仲間たちに出会った。「職場が理解してくれなかった」「給料を下げると言われ、悔しくて辞めた」。みな働きたい気持ちを持っていた。がんだけではないと思った。

また当時の労働戦略に「患者」は含まれていないことを知った。「病気と仕事は社会問題」。この声を社会に届けなくてはと思った。

ちよつとそのとき、「東京大

「がん患者も働きたい」伝える

学医療政策人材養成講座」の4期生の募集が目の前だった。講座は、患者・支援者、マスメディア、医療者、行政など医療に関わる立場の人々が集い、政策を議論する場だった。選考は履歴書と論文だった。

私の論文のテーマは「小児働く世代がん患者に対する医療政策への期待と方策について」だった。

論文では「日本の柔軟性を欠いた雇用制度が、がん患者が自分らしく生き続けることを難しくしている」と主張した。特に、若年のがん患者が仕事を失うことは生きがいの喪失にもつながり、人生の質が著しく損なわれることは認識されるべき課題と指摘。そのうえで、生きる意欲や個々の能力を十分に発揮できる協働・共生型社会の建設こそ、これからの医療政策が進むべき方向性だと訴えた。2007年の春が終わったころ、合格の連絡が届いた。